表紙の人

学生記者が取材・編集する大学広報誌 Hakumon ちゅうおう

# 公共政策学会の学生政策コンペで会長賞受賞 細野ゼミのゼミ長として政策立案に奔走

総合政策学部3年 **新井広子さん**

## 「食と教育の連携を」をプレゼン

10月3日に柏市で行われた日本公共政策学会主催の学生政策コンペで、総合政策学部の細野助博ゼミナールが日本公共政策学会会長賞（総合1位）を受賞した。細野ゼミが「持続可能なまちづくり」をテーマにプレゼンテーションした「新しいライフスタイルを創造するまちづくり―食と教育の連携を通じて―」が、栄冠を獲得したのだ。

政策立案作業の中心となったのが、細野ゼミのゼミ長、新井広子さん（総合政策学部3年）。その政策を具体的な活動に移したのが、本号のシリーズ『大学と地域』で紹介している「体験型環境教育プロジェクト」で、新井さんはプロジェクトでも中心となって活動した。

学生政策コンペは、10月3、4両日に開かれた「公共政策フォーラム2008 in柏」の初日に行われ、首都圏の大学を中心に九州や関西の大学も含む15程度の大学が参加した。フォーラムのテーマは、柏市の中核市移転を契機として、「自立都市を目指して―民・産・学・官の協働によるまちづくり」で、その一環として学生政策コンペは行われた。

細野ゼミがプレゼンで目指したのは、複雑化するさまざまな課題を「連携を通じた人づくり」で解決し続けていくまちづくりだ。

## 先輩、後輩の支えが励みに

新井さんはゼミ長として、今年5月頃から、「食を素材とした環境教育」というテーマを設定し、研究をはじめた。3年生のゼミのメンバーは3人。他の2人は忙しいこともあり、新井さん1人に大きな責任とプレッシャーがのし掛かった。

7月からは、具体的にコンペに向けての準備を開始。新井さんを中心に3年生が準備してきた資料を細野先生や細野ゼミの先輩・後輩がチェックする作業が続いた。

「一生懸命考えて準備してきたものを、チェックの時点で細野先生にバサバサと切り捨てられていって、悔しくてみんなの前で泣いてしまうこともありました」と新井さんは振り返る。

そんな時に助けてくれたのが、先輩や後輩たちだった。先輩はプレゼンのやり方などを教えてくれ、後輩はパワーポイントの色遣いや文字の大きさなど改善点を指摘してくれた。「細野ゼミの縦のつながりの強さが大きな励みになった」という。

## 政策を実証したことが評価得る

プレゼンでは、世界の二酸化炭素排出量の見通しや、日本の少子高齢化、食料自給率の低下などの現状を分析。そのうえで、人と人のつながりが希薄化しているなかで、「持続可能なまちづくり」

をはかっていくには、「複雑化する問題を自ら解決していくライフスタイルを確立した人を創る」ことだと政策提言した。

コンペで総合1位となった理由について新井さんは、「他大学の発表は、こういう政策が良いと思います、という政策提言に終始していたのに対し、細野ゼミは政策を立案し、実際に多摩地域を対象に実証できたのが評価されたと思います」と分析する。

細野ゼミは、「食を素材とした環境教育」を実現するために、「民」＝子どもと保護者、「産」＝企業やＮＰＯ等19団体、「学」＝学生46名（9大学）、「官」＝6市教育委員会・昭和記念公園事務所―の地域連携の基盤づくりを行い、小学生を対象としたアクティビティを行った。

それが「それいけ！多摩レンジャー」と題した「体験型環境教育プロジェクト」だ。具体的にさまざまなアクティビティを行ったことが、政策コンペの審査員からは「他の大学と比較して群を抜いていた」と評価されたという。

受賞の喜びと感謝を語る新井さん

## 受賞に「よかったね」と細野教授

細野ゼミは、このフォーラムで毎回何らかの賞を受賞してきたが、最優秀賞である日本公共政策学会会長賞を受賞したのは4年ぶり。

みんなで作り上げたコンペだったからこそ、新井さんは会長賞を受賞した時には、「嬉しくて自然と涙が出てきた」そうだ。仲間と共に一生懸命何かを作り上げる、という経験が、仲間同士の関係をとても深いものにする。そこに新井さんはやりがいを感じているという。会長賞を受賞した時に、細野先生が「よかったね」と嬉しい顔をしてくれたのが何よりだった。

新井さんは大学入学前から、「アフリカの貧困の現状を改善したい」という思いがあり、実際に調べてもみたが、「自分が世界の問題に取り組むのはまだ早い」と思い直し、自分の身近な地域のまちづくりに興味を持った。

2年生で細野ゼミに入ってからは、生活の中心がゼミ活動となり、大学生活のほぼ全てをゼミに費やしてきた。「もし細野ゼミに出会っていなかったら、私の大学生活がこんなに思い入れのあるものにはならなかったと思います」と、新井さんはゼミでの活動に大きな喜びを感じている。

新井さんは立川市出身で、「立川をここまで発展させたのは細野先生です」という。細野先生は立川市の商業活性化構想に関わるなど、多摩地域の開発に深く関わっている。

## 目指すは「地域に貢献する人」

新井さんの夢は、「地域に貢献する人」。自分がまちづくりに直接参加できなくても、「市民議会」などの制度を使ってまちづくりに関わっていきたいという。「その地域の人たちの文化を壊すことなく、人々の生活環境を少しでも良くしていきたい」という思いがあるからだ。新井さんが大学で学んだまちづくりのスキルが、いつか社会でいかされる日がくるだろう。

**（学生記者　石川可南子＝法学部1年）**